

LEGENDS to restart 未来からの来訪者と、再会を願う現代の子供達

natsuki

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

パルデア地方に過去のポケモン「パラドックスポケモン」をこれ以上出さないために、タイムマシンを止めるために、オーリムAIは過去の世界へと旅立つ。

そして、目を覚ますとそこは遙か昔のシンオウ地方……ヒスイ地方だった。

そして、オーリムAIが辿り着いたと同時に、時空の裂け目が再度姿を現し、ヒスイの生態系は大きく崩れつつあった。

オーリムAIはタイムマシンを止めるために、ギンガ団とともに行動を開始する。

そして、時を超えて現代のパルデアでも、オーリムAIとの別れを変えることが出来ないか、模索を始めるのだった……。

◇本作は「レジエンズアルセウス」と「SV」を上手くクロスオーバー出来ないかなと思って、書いてみた作品です。いずれもエンディング後の時系列。よって、ネタバレはあります。ご留意ください。

◇「そんなこと有り得んじゃん」という話もありますが、妄想です。すいません。細かい話は目を瞑ってもらえると幸いです。帳尻はなるべく合わせます。

目次

| | | |
|-----|------------|---|
| 第一話 | ヒスイの地 (前編) | 1 |
| 第一話 | ヒスイの地 (中編) | 4 |
| 第一話 | ヒスイの地 (後編) | 7 |

第一話 ヒスイの地（前編）

結晶により生み出された部屋。

或いは……結晶を切り取ったような部屋。

その中心にある人工物、その高台には一人の女性がいた。

正確には、女性ではなく、その女性をモチーフにしたAIであったのだが。

「戻った……のか？」

階下に立つ、彼女の子供が告げる。

AIは、語りかける。

「ああ……、この結果は最高の科学力を持つAIにも、計算することは出来なかった。君たちならば……絶望の未来を乗り越えた君たちならば、自分が選んだ道を、胸を張って進めるだろう」

踵を返す。

「ありがとう、アオイ。そして……子供達」
だが。

「私がいる限り、タイムマシンは止まらない……。どうやら、私そのものがタイムマシンを復旧する、システムの一部と化しているようだ」

「何だよ、それ……！ そんなのってあんまりちゃんだぜ……」

「済まないな。君たちの冒険を、見ていてずっと思っていた……感じていたことがある」

それは、自由だ。

その自由さが、素晴らしく、そして、羨ましい。

「仲間を思い徒党を組んだり、強さを求めて戦いに身を委ねたり、大事な物を守るために大きな敵に立ち向かったり、捕まえて戦って自分だけの宝物を探したり……」

「アギヤ、アギヤス！」

アオイの前に立っている、白と青の鶏冠が似合う雄々しいポケモンは、言う。

それを聞いて、女性は笑みを浮かべる。

「フフ……、その翼で大空を翔け回ったりも、したことだろう」

一歩、前に進む。

「私も、君たちのように、自分だけの宝物を見つけたいと……そう思った。そしてそのために……私は今から、過去へと向かう」

「そんな！ せっかく……、せっかく会えたのに！」

アオイの隣に立つ、精悍な顔立ちの、背の高い少女は言う。

「これは、タイムマシンを止めるためでもある。このままではタイムマシンは、止まらない。きつと過去のポケモンをこのまま排出し続けることだろう。エリアゼロもいつまで耐えるか分からない……。ならば、過去に行く。何しろ、私自身が夢にまで見た古代の世界を、見たくてたまらない。冒険に胸を躍らせる……、やつと、やつと意味が分かった気がするよ」

「……そんなの、」

「ペパー、今まで真実を言えず……済まなかった。オリジナルを受け継いだ私には分かる。君の母親は……君を、本当に愛していたよ」

「今更言うんじゃねえよ！ ……そんなの……、そんなのずりいよ……！」

ペパーは、絞り出すように言った。

「そうだな、済まない。……ペパー、コライドン、アオイ。少し寂しいが、お別れだ」

左手を挙げる女性に、ペパーは声を掛ける。

「……母ちゃん！」

「さらばだ、自由な冒険者達よ！ ボン・ボヤージュー！」

そして、そして……そこで、女性は過去へと旅立った。

そう、そしてこれは今までの私のモノローグ。

或いは、走馬灯のようなものだっただかもしれない……。

人間であろうとロボットであろうと、過去から未来へ、未来から過去へ移動すると肉体が持たないだろうと言われている。過去のポケモンがその姿を保ったままエリアゼロにいるのは、ポケモンと人間とは違う、何か別の物質があるのだろう——確かオーリムはそんな研究

をしていた。

そして——目を覚ますと、そこは砂浜だった。

パルデアとは違う、長閑な風景。

空気を感じると、明らかに違うそれは——過去へと到着したという意味なのだろう。

しかし——。

「ここは、何処だ？」

いずれにせよ、私はこの場所が何処なのかを確かめなくてはならぬ。

ポケモンが居るのか、人間が居るのか、どちらも居ないのか……。もし最後だったら、タイムマシンを使った意味など何一つなかった。今思うと、タイムマシンすら何処に行ったのか定かではないが……。

ふと、空を見上げると、大きな山の上に真っ暗な穴が開いていた。

「あれは……あれは何だ？」

一先ず、話が分かる人間に会いに行こう。私はそう思い、一歩また一歩と前に進むのだった。

第一話 ヒスイの地（中編）

「時空の裂け目が……！」

テル先輩からの声を聞いて飛び起きた私は、急いでギンガ団本部へと足を運んだ。

ギンガ団は、ヒスイ地方にある調査隊……みたいなもので、ヒスイ地方のポケモンの研究に携わっている。ラベン博士はモンスターボールの開発に勤しんでいるし、きつと未来ではもつと名前が知られているに違いない。

話は変わるけれど、ギンガ団本部は三階建てだ。一階には調査隊隊長のシマボシさんが居て、二階を挟んで、三階に団長のデンボクさんが居る。

そして、今三階には私とテル先輩、ラベン博士とコンゴウ団のセキさん、シンジュ団のカイさんも居た。今日の今日聞いたはずなのに、どうしても居るのだろう……。未来みたいにスマートフォンがある訳でもないし。

「時空の裂け目……。あの忌々しい割れ目は、確かに収束したはずだ」
デンボクさんは忌々しくテンガン山を見つめながら、呟いた。

「でもさ、デンボクさん。未だあれが時空の裂け目だと決まった訳じゃ……」

「忘れた訳ではないだろう、シンジュ団のカイ」

デンボクさんが、カイさんを叱責する。

カイさんは、明るい方向に物事を見ようとする。それが良い方に向くこともあるのだけれど、今回は違いそうだ。

「……兎に角、あの時空の裂け目をどうにかせねばなるまい。シンジュ団とコンゴウ団にも、何かしら連絡が届いているのでは？ 静まったキングとクイーンは？」

「それが……」

「ツバキは早々に連絡を寄越してきたな。また迎月の戦場が騒がしくなったとも言っていたか」

「じゃあ……マルマインが？」

こくり、と頷くセキさん。

そんな中、シマボシさんが三階に上がってきた。

「どうした、シマボシ。今は会議中だが」

「来客だ。それも……シヨウ、お前に似た感じの、な」

「私に？」

もしかして、この時空の裂け目も何か関係があるのだろうか——私はそう思いながら、一階へと降りることにしたのだった。



「いやはや、凄いねこれは……。ヒスイ地方は確か歴史書に載っているぐらいでしか知識は持ち合わせていなかったが……」

ラベン博士の居る部屋には、客人が座っていた。

白衣を身に纏い、何処か原始時代的な、スポーツ選手が着るような格好をした女性だった。

「あなたは……う？」

ラベン博士が問いかけると、女性は目を輝かせて、

「おおっ！ まさかあなたはラベン博士か？ ヒスイ地方でモンスタールボール、その原型を開発したと言われている！」

「そ、そうなのですか？ いやー、私も随分とフェイマスになってしまいましたねえ……」

「ということとは、ここは間違いなく、ヒスイ地方なのか……」

落胆する女性。

「あの、もしかしてあなたは……この世界の人間ではないのですか？」

私は、思い切って話を切り出す。

それを聞いた女性は、目を丸くする。

「どうして、それを？」

「だって、この時代の……この世界に居る人間とは思えないもの。まるで、遠い未来か、別の世界から来たような……」

「シヨウも、確かそうだったよな。だから変わったものだって持っているんだぜ、ほら」

テル先輩に従って、それを見せる。

アルセウスフォン。それは、このヒスイの人間には奇怪な物としか認識されていないけれど――。

「それは……ロトムフォンか？ ロトムは、中に入っていないのか？」
やはり、知っている口ぶりだった。

初めて未来なり他の世界の記憶を覚えている人間と出会ったような気がする……！

私は少しだけその感動に浸ろうとした、が――。

「失礼する」

直後に入ってきたのは、シマボシさんだった。

第一話 ヒスイの地（後編）

「シマボシさん……」

「単刀直入に言う。お前は敵か？」

シマボシさんの言葉は、至極尤もな言い方だった。当然といえば、当然なのかもしれない——ともあれ、シマボシさんとしても、この異質を少しでも取り除きたいなどと思っていたのかもしれない、けれど……。

「……申し訳ないが、いきなりそう言われても私はどう答えれば？」

「時空の裂け目を知っているか？」

「時空の裂け目……？」

女性の反応を見て、シマボシさんは深い溜息を吐く。

「そういう反応ということは分からないのだな……。全く、こうも問題ばかり起きると困るのだが……」

シマボシさんは何度も溜息を吐きながら、頭を抱えていた。

仕方ないと言えば仕方ないのかも。今まで時空の裂け目を閉じるために必死にギンガ団一丸となって頑張ってきて、漸く休息のひとつきがやってきたというのに——。

「今、何が起きているんだ……？ 私はまだ、タイムマシンを使つて……」

「タイムマシン？ それは何だ？」

シマボシさんの言葉は、鋭く突き刺さる。

しかし、私はその答えを知っていた——タイムマシン、それは時間を旅する装置。けれども、私が暮らしていた世界でもそんなものは夢のまた夢だったような気がするけれど……。

「タイムマシンは、時間を移動できる代物。けれども、その具体的なギミックは我々にさえ理解することが出来ない……」

「時間を……移動できるっ？」

シマボシさんは首を傾げながらも、さらに話を続けた。

「ならば、時空の裂け目と何ら関係はないと？」

「関係はない……と思われるが、そもそも時空の裂け目とは？ あの

山の上に広がっていた、あの穴のような奴か？」

女性の言葉に、シマボシさんは頷いた。

「……その様子だと、本当に知らないようだな。しかし、そうなる困ったものだ……。ならば、どうしてあれはまた発生した？ あれの元凶とされる存在は既に沈静化したはずではなかったのか？」

シマボシさんは頭を抱え、踵を返す。

「どちらへ？」

「私も暇ではない。その人間が時空の裂け目の主犯格でないのなら、やらないといけないことは変えなくてはならない。人々の不安を取り除くのが、我々ギンガ団の役目だからだ」

そう言って、シマボシさんは部屋を出て行った。

相変わらず、忙しい人だ。

それはさておき、先ずは目の前の問題を解決しないといけない……。

「ええと、それじゃあ……あなたの名前は？」

私は問いかける。

女性は少し考えている様子だ。どうしてだろうか？ 自分の名前であれば別に直ぐに言えば良いような気がするけれど。

「私は……オーリムだ。未来のとある地方でポケモン博士をしている。いや、正確にはしていた、というのが正しいのかな……。いずれにせよ、私がやって来たことが、この世界に何らかの影響を与えているというのであれば、私はどうにかしないとならない。そうだろうか？」

何処か言い回しが遠回しな感じがするけれど、まあ、それはそれで良い。

ヒスイの人達に慣れてしまっただけのような気もするし。

そう思いながら、私は手を差し伸べる。

「……？」

「握手、しましょう？ 別にヒスイの常識だとかそういうことではないのだけれど……。初めて出会った人に、握手をすることは何もおかしい話じゃないと思うよ？」

「フフ。それも——ああ、いや、そうかもしれないな」

何かおかしいなことを言ったかな？　と思ったけれど、人の笑いの沸点なんてそれぞれだ。

別に、自分がおかしいことを言っていないと思っていれば、それで良いのだ。

そう思って、私はオーリムさんと握手を交わすのだった。